

京都に原爆が落ちなかった理由

石田 拳也

(丸田 博之ゼミ)

目次

はじめに
第一章 原爆投下候補地
第二章 ウォーナー恩人説とは
第三章 陸軍長官 ヘンリー・スティムソン
第四章 スティムソン論文(日記)から読み解く 真実
第五章 原爆投下は本当に必要だったのか おわりに
参考文献・注釈

はじめに

私は第二次世界大戦について興味を持ち、その中でも原子爆弾について興味を持った。

日本は世界で唯一の被爆国¹であり第二次世界大戦中に広島と長崎に投下された。

原爆投下の候補地には、広島、長崎のほかに鎌倉や金沢なども候補地として挙がっていた。

候補地として選ばれるにはいくつかの条件があるが、京都はその条件のほとんどを満たしており、原爆投下の第一候補地²に途中まで挙げられていた。にもかかわらず京都には原爆が落とされることはなかった。それはなぜなのか、当時のアメリカ軍部での記録³、日本国内の記録から論じる。本論後半では京都に原爆が落ちなかった理由だけでなく原爆自体を落とす必要があったのかということについても原爆投下を決定した人物の当時の手記⁴、それに反対意見を表明した人物⁵を引き合いに出して論ずる。

第一章 原爆投下候補地

原爆が落とされたのは結果的には広島と長崎ではあったが、アメリカが初期から長崎と広島を原

爆投下目標地にしていただけではない。日本の全国の都市について様々な項目から分類し、候補地として適性をランク付けしていた。

候補地の基準としては

1. 直径3マイル以上の都市であること
2. 高度な戦略的価値を持つ都市
3. 比較的空爆の被害が少ない町

の3つが大きく上げられた。その後追加の条件として「爆風で効果的に損害を与えられること」などが追加された。この時点で広島、京都、横浜、小倉に絞られることとなった。その中でも京都、広島がAA級目標、次いで横浜、小倉がA目標に定められた。

投下地点は、気象条件によって都度、基地で決定する。

投下地点は、工業地域の位置に限定しない。

投下地点は、都市の中心に投下するよう努めて、1発で完全に破壊する。

という3点も後の会議⁶で項目に追加されることになる。これらの条件を満たしている都市は空爆禁止令が出された。意図としては、空爆の威力を正確に測定するためである。

この時点では広島と京都がAA級目標であることは先ほど記したがなぜ広島と京都がAA級目標であったかという、広島については一番大きな要因としては日本の中で大規模な造船所⁷があったこと。次いでおおきな軍事基地があったこと、当時は人口も日本の中でもかなり多く、瀬戸内海側で比較的晴れやすく原爆投下の威力を測りやすかった点も要因の一つとしてあげられる。

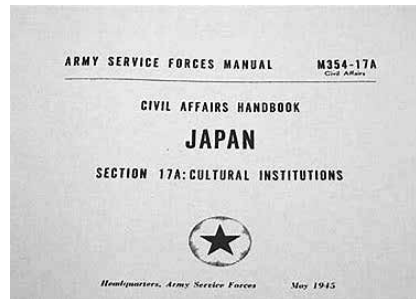
京都については人口が多く、京都盆地で周囲が山に囲まれているため威力を観測する上で日本の中で最適とまで言われたこと。この1点が京都をAA級目標たらしめる理由であった。結果としてはAA目標であった広島には原爆が投下され甚大な被害を受けることとなった。そしてその1週

間後には長崎に投下された。長崎は前述の候補地には入っていなかったが小倉が投下予定日当日、天候不良により空爆の威力を測定する上で不向きとされ急遽目標地を長崎に変更し投下されたのである。2回の原爆投下を受け日本はポツダム宣言を受諾し降伏することとなった⁸のだが、その結果京都には投下されることが無かった。あれほど京都が原爆投下候補地として優れていたにもかかわらず投下されなかったのである。なぜなのか、実は投下地を最終決定する直前に京都は候補地リストから削除されたのである⁹。京都への原爆投下に大きく反対したのがヘンリー・スティムソン陸軍長官である。ヘンリー・スティムソンが軍部では京都一択とまで言われた原爆投下地としては最適ともいえる京都をなぜ反対したのか、その点については本論文の第三章にて詳しく論じていく。この章では京都は空爆投下にとっても適していたがヘンリー・スティムソン陸軍長官の働きによって実際に投下されることはなかったことを指摘しておく。

第二章 ウォーナー恩人説とは

前章で京都は原爆候補地ではあったが結果的には投下されることはなかった。空爆投下直前まで候補地ではあったため、空爆禁止令が発令されていた京都は日本全国の中でも有数の都市であるにも関わらず空爆の被害がほとんどなかった。当時すでに東京大空襲¹⁰も起きており、すぐ近くの大阪も空襲で大きな被害を受けていた。他にも名古屋や神戸など大都市が軒並み焼夷弾攻撃にさらされるなか、京都だけが無傷のままであった。当時の京都市民はこのことを不審に思い、これはアメリカが文化財保護のために京都攻撃を避けている、と次第に信じるようになる。

ここから、戦後の「ウォーナー恩人説」が生まれる。すなわち、京都が爆撃を免れたのは、アメリカによる文化財保護政策のおかげであり、その恩人はウォーナー博士¹¹であるという説である。このウォーナー博士とは誰なのか、本名はラングドン・ウォーナーといい、アメリカの美術史家である。(上写真の石碑の人物)シルクロードの探検家であり、アメリカ芸術科学アカデミーフェ



ロー¹²でもあった。この肩書だけでは無関係のようにも思えるが恩人説が当時の京都で広まったのには理由がある。それは四三年八月二十日に結成されたロバーツ委員会¹³の報告書に、通称ウォーナー・リストと呼ばれる『陸軍動員部隊便覧民事ハンドブック 日本 17A・文化施設』を提出したことに由来している。このリストは日本の重要文化財をランク分けしている地図のようなものだと思ってもらえればいい。このリストには京都の文化財が多く乗っておりその文化財を避けて空爆しているという噂が流れリストを作成したウォーナー博士に感謝をしめすというものである。しかし、当時の京都市民がロバーツ委員会の報告書にそのようなリストが提出されたことなど普通は知る由もないはずである。ではどこでその情報が広まったのか。それは当時トップジャーナリズムであった朝日新聞が4面しかない新聞の面にウォーナー博士を名指して「古都を守ったウォーナー博

京都に原爆が落ちなかった理由

士に敬意を捧げる」と発表したことが原因である。その記事では矢代幸雄氏¹⁴の「敬意を捧げる」発言が掲載されており、日本国民に米国への感謝、ウォーナー博士への感謝の念が盛り上がったのである。

しかし、この説は現代においてかなり否定的な意見が多い。

まず、京都に空爆が少なかった理由としては原爆の候補地であり、アメリカ軍部は原爆の威力を測定したかったため、候補地にはできるだけ空爆を控えるようにしていたことは先ほど述べた。ほかにも当の本人のウォーナーはこの説を否定している。2003年吉田守男氏¹⁵がウォーナー恩人説の検証と反論「日本の古都はなぜ空襲を免れたか(朝日新聞社)」を発表し、それはウォーナー伝説であり、創られた話であると論じた。吉田守男の論文の最終章では、次のように論じている。

敗戦直後の拒然自失している日本人にとって「古都 京都・奈良・鎌倉を守ってくれた米国人ウォーナーに感謝」する感情が盛り上がるのを見込んでのことである。反米感情から親米ムードに切り替える恰好な材料として利用したウォーナーリストを利用したのだ。

つまりGHQは鬼畜米英の反米思想に凝り固まった日本国民の思想を改造して親米に切り替える手段としてウォーナーリストを利用したという見解である。

確かにその効果としてはかなり大きく当時はまだ反米思想が国民には大きく残っている中、少しでも日本に親米ムードを浸透させたかったアメリカの思想統制の一つとしておおきな成果が出たと考えられる。

ウォーナー博士本人も「自分はリストを作っただけで、マッカーサー¹⁶が爆撃するかしないかは決めたことだ。故に自分が恩人扱いされることは違う」と繰り返し述べたという記録も残っており、ウォーナー恩人説はGHQの思想統制の一つの道具として作られた説であるというのが現在の論である。それに加えてウォーナーリストは文化財保護のために作成されたわけではないという見方もある。そもそもウォーナーリストに載ってい

る文化財は京都だけではなく全国の文化財がリスト化されているのでそこを避けて空爆しているのであればほかの地域も空爆されていない地域があるはずである。ウォーナーリストを作成した理由として有力なのは日本の本土上陸作戦を見越してであると考えられている。本土を上陸して攻め込むときの文化財保護、もしくは軍部の基地などの判別などに関して使用するという意図だったという説が有力である。恩人説に関しては私も資料を読み調べていく中でアメリカの戦後プロパガンダの一つだと考えた。京都に原爆を落とさなかったことは意図的ではあるがそれはウォーナーリストによる影響とは考えられにくい、空爆をするうえで文化財をできる限り焼失させないためにリストを作ることまではあってもおかしくはないと思うが、文化財が多すぎたため京都を攻撃しないのは戦争中においては愚かな行為であるといえる。極端に言えば、小国でその国全域が文化財で埋め尽くされている場合、空爆が出来ないということになってしまう。人類の遺産を守ろうとすることは素晴らしいことではあると思うが、戦時中にそれを実現するのは難しいであろう。もう一つの理由として空爆の難しさにある。空爆というのは、その時の天候や、操縦者の腕によって爆弾や焼夷弾の投下位置が変わるものである。文化財の位置を大まかに知っていたとしても、その文化財だけを避け、それ以外の個所を空爆することはかなりの至難の業である。空爆を狙って落とすことは簡単ではないという記述もある。

第三章 陸軍長官 ヘンリー・スティムソン

スティムソンは、ナチス党政権下のドイツに対する攻撃的な姿勢のために、陸軍とその一部である陸軍航空軍の責任者に選ばれ、第二次世界大戦期における民間人出身の陸軍長官として最もよく知られている。1200万人の陸軍兵と航空兵の動員と訓練、原子爆弾の製造と使用の決断を管理した人物であり、戦時中に軍部で大きな権限を持っていた一人である。

スティムソンは原子爆弾に関して、マンハッタン計画¹⁷の長であるレズリー・グローヴズ少将を監督し、原爆投下決定を検討したとされる「暫

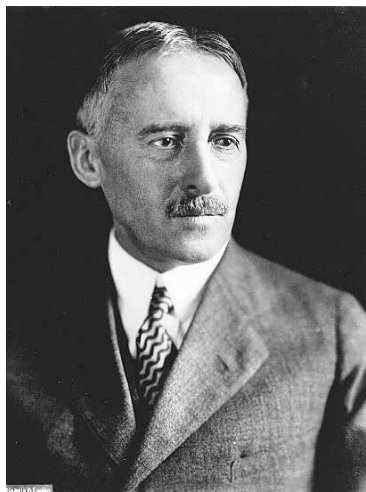
定委員会」の委員長を務めていた人物である。ルーズヴェルトと後任のトルーマンは共に、原子爆弾のあらゆる局面で彼の助言に従った。つまりは原子爆弾に関することほとんどの最終決定が彼によって行われていたのである。

第一章ではヘンリー・スティムソンが京都への原爆投下に強く反対したと記した。この章ではなぜ京都を候補地から外したのかを論じる。

スティムソンは当時日記をつけており、その日記には原爆投下地を広島に決定し、京都を候補地から外した日のことを綴っている。

With President warm support, I removed Kyoto from my list of targets. Although Kyoto was considered an important military base, it was the ancient capital of Japan and a sacred place for Japanese art and culture. We decided that Kyoto must remain. I approved the targeting of four cities, including Hiroshima and Nagasaki.]¹⁸

トルーマン大統領から暖かい支持を受けたうえで私は攻撃目標のリストを京都から除いた。京都は重要な軍事拠点と考えられていたが、日本の古都であり、日本の芸術と文化の聖地であった。われわれは、京都は残さなければならないと決断した。私は広島と長崎を含む4都市を投下目標とすることを承認した。



このように日記からは京都は日本の文化の象徴でありそこを破壊してしまうと日本人の反感を買い、終戦後の統治が大変であると考えて京都を候補地から外したことがわかる。

米軍内でも京都を候補地から外すことはかなり反対を受けたが、それでも外した。日記では日本の文化地であるからとしか書かれていないが、ほかにも考えられる理由が一つだけある。それはスティムソンのハネムーンの地が京都であるということだ。戦前スティムソンはハネムーンで京都に、その後もよほど気に入ったのかも一度京都に旅行をしに来ていた。当時すでに日米関係がいいといえない時期に旅行に来ているのである。それほどまでに京都を気に入っていたのである。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校歴史学教授のロナルド・シェイファー『アメリカの日本空襲にモラルはあったか—戦略爆撃の道義的問題』によれば、京都に原爆が投下されなかった理由は、スティムソン陸軍長官の「感傷」によるとされる。スティムソンは京都の文化的・宗教的重要性を認識していた。マクロイ陸軍次官補に「もし自分が提案されている標的リストから京都を除外したら、君は私を「感傷的な老人」と思うか」と尋ねたという記録も残っているのである。軍人であり陸軍長官という肩書ではなく一個人としてのスティムソン個人の気持ちでは何としても京都に落とすはたくなかったであろう。

実際に当時の日記には「これほど美しく綺麗な都市は今まで見たことが無い。」¹⁹と記録していたほどである。京都が日本で一番の文化都市であり、原爆を落としてはいけないと考えていたことが顕著に現れている。もとよりハネムーンの地だから破壊したくないという私情もあったのかもしれないが、一番の理由としてのちの国際世論、すなわち至高の文化都市を破壊したことへの世論の反発を考えてのことであるということは忘れてはならない。そして殊、日本国内の世論に絞れば以下の事情がある。

原爆投下の時期というのは戦争が連合国側の勝利で終わることはほぼ確定しており、どのように終戦させるかという観点で軍部や政治上でも議論が起こっていた。アメリカが終戦後に危惧していたことはロシア（当時はソ連）との対立である。連合国

京都に原爆が落ちなかった理由

としては味方であるが終戦後は対立関係になるという可能性があった²⁰。そこでアメリカが防ぎたかったのはロシアの南下である。ヨーロッパ側の南下に対してはヨーロッパ諸国が連合国側にもいるのでヨーロッパ諸国が止めてくれると考えられ、問題はアジア側であった。かつて日露戦争で日本が勝利したおかげで南下政策は一度止まったが、再度南下してくるのは防ぎたかった。そのためにはアメリカとしては終戦後も日本と友好関係を結びロシアを共通の敵（言い方が激しいが）とみなしていこうとしていたのである。しかし京都という日本を象徴するような土地に原爆を投下し、終戦後日本を統治しようと試みても、多くの文化財を米軍に焼かれた日本人の反米思想を覆すことは簡単ではなく、ロシア側と手を組まれるのを恐れたというのも大きな理由の一つであると考えられる。

スティムソンは陸軍長官であり、戦争後の日本の統治に関して、間接的であれ関係していく人物であった。日本という国及び京都を訪れていたからこそ京都がいかに日本の象徴的な町であるか、そしてそこを原爆投下地にすれば日本人の大きな反感を買い日米間の関係を改善することは難しいと判断したのだろう。

第四章 スティムソン論文（日記）から 読み解く真実

前章ではスティムソンが原爆投下を反対したということが分かったがそれは“京都に対しての”原爆投下反対である。原爆を投下すること自体は賛成していた人物である。本章では、原爆投下の第一人者であったスティムソンがなぜ原爆の投下に至ったのかをスティムソンが当時書いていた日記と終戦後に雑誌に掲載した論文から読み解いていく。以下の引用はスティムソンの日記、もしくは終戦後の論文から抜粋した文である。²¹

The two atomic bombs we dropped were all the weapons we had ready, and the rate of production of these weapons at that time was extremely slow. Had the war continued by the time of the scheduled landings on November 1st, further conventional

bombing by B29 bombers would have been carried out, and the extremely limited number of atomic bombs that might have been carried out during the same period. It would have cost far more lives and property than a bomb attack would have. However, the atomic bomb was a weapon that was much more than horribly destructive. It was a psychological weapon. In March 1945, Japan's air force conducted the first large-scale incendiary bombing attack on Tokyo. The damage and death toll caused by this airstrike exceeded that caused by the dropping of the atomic bomb. Hundreds of bombers took off and dropped hundreds of tons of incendiary bombs. Similar successive attacks burned most of Japan's urban areas, but the Japanese continued to fight. On August 6, a B-29 bomber dropped an atomic bomb on Hiroshima. Three days later, a second atomic bomb was dropped on Nagasaki, ending the war. At least we were able to convince the Japanese that we had the ability to dispatch many bombers at once and carry out endless nuclear attacks if necessary. As Dr. Carl Compton said, "It was not the single atomic bomb itself that brought happiness, but the actual impact of each atomic bomb on society, plus the use of more atomic bombs." It was the fear that the situation would fail that brought about the results." The atomic bomb was thus perfectly suited for the purpose for which we intended it. It became possible for the pacifists to take the path to surrender, and all the powers of the Emperor were exercised in seeking peace. Once the Emperor ordered surrender and the small group of dangerous fanatics who opposed it were captured, the Japanese became so docile that train bathing and disarmament were carried out with unprecedented ease and perfection.]

以下は上記の日本語訳である。

われわれが投下した2発の原子爆弾は我々が準備できた兵器の全てであり、この兵器の当時の製造速度は極めて遅かった。予定されていた11月1日の上陸作戦の時期まで戦争が継続していたとすればB29爆撃機によるさらなる通常爆撃が実施され、同じ時期において実施されていたかもしれない極めて限定的な数の原子爆弾攻撃の場合と比べて、はるかに多くの人命や大量の財産を奪っていただろう。しかし、原子爆弾は、恐ろしいほど破壊的である以上の特徴をもつ兵器であった。それは、心理的な兵器であった。1945年3月我が国の航空隊は、東京に最初の大規模な焼夷弾攻撃を行った。この空爆によって生じた損害と死者の規模は原爆投下の被害を上回るものであった。数百機の爆撃機が飛び立ち数百トンの焼夷弾が投下された。同様の引き続いた攻撃が日本のほとんどの都市部を焼き尽くしたが、日本人は戦い続けた。8月6日、1機のB29爆撃機が1発の原子爆弾を広島に投下した。3日後、長崎に2発目の原子爆弾が投下され、戦争は終わった。我々は必要であれば多くの爆撃機を一気に出撃させて際限のない核攻撃を実施する能力を持つと、少なくとも日本人には思わせることが出来たのである。カール・コンプトン博士²²が述べたように『幸福をもたらしたのは、1発の原子爆弾そのものではなく、1発の原子爆弾が実際に社会に与える影響に加えて、さらに多くの原子爆弾が使用されるのではないかという恐怖こそが成果をもたらした』のである。原子爆弾はこのように我々が意図した目的に完全に適うものであった。和平派が降伏への道をとることが可能となり、天皇の全ての権限は平和を求めることにおいて行使された。天皇が降伏を命令し、それに反対する少数の危険な狂信的集団が拘束されると、日本人は非常に従順になり武装解除は前例のない容易さで完璧に実行された。

ここでは原子爆弾投下による犠牲のほうがそれ

によって回避できた犠牲よりも小さかったと表現している。この論文にはアメリカ国内でも賛否両論であり、多くの否定的意見が一般人を無差別に殺すことは戦時国際法²³に違反しており、非人道的だという意見である。戦時国際法には、「非戦闘員とは、軍隊に編入されていない人民全体を指し、これを攻撃することは禁止されている。また、軍隊に編入されている者といえども、降伏者、捕獲者に対しては、一定の権利が保障されており、これを無視して危害を加えることは戦争犯罪である」と明記されており、原爆投下は一般人を巻き込むため違反しているという意見である。しかし、スティムソンは原爆投下を決定するまで30年間以上もの間、戦時国際法と倫理の重要性を擁護し続けてきた人物であった。軍人でもあり閣僚でもあったからこそ、繰り返し戦争は人道的な範疇に制限しなければいけないと主張していた。東京大空襲についても航空隊の司令官に対して厳しく問いただし、東京に対する明らかな無差別爆撃が本当に必要なかどうかを確認したという記録もある。スティムソンは自身が実際に空爆したことが無く、空爆とは狙った位置にほぼ間違いなく精密射撃、精密爆撃が出来るという考え（机上の空論）があったということもあるが、空爆やそのような軍事作戦においても正当な軍事的目標というものを用いる必要があると信じていた。基本的な戦争というのは敵国の軍事基地を徹底的に破壊し、軍事力のある程度削れば敵国は降伏するものなのである。しかし、今回の敵国であった日本はそうではなかった。戦闘機による神風特攻隊、地上戦においては全員が戦死するまで玉砕覚悟の戦闘、海においては人間魚雷回天など、文字通り命を賭して最後まで戦い抜く軍隊だったのである。

スティムソン自身もそのような戦時中の状況から正当な軍事的目標のみを破壊することは不可能であり、すでに当時における戦争は国全体を巻き込む全面戦争であるということは口にはしなかったがうすうす感じていたはずである。多少の犠牲を出してでも戦勝によって平和を取り戻すことが最優先であり、そのために要求されるいかなる対価よりも優先された1945年においては原爆投下を下す判断というのはそれほど迷うものではなかつただろう。付け加えて、スティムソンは

京都に原爆が落ちなかった理由

1945年3月に航空隊員の再配置を行うためにフロリダの本部隊を視察した。そこで彼は、ヨーロッパでの戦争を終えた後に、太平洋での戦いのために飛び立とうとしている兵士たちと会って言葉を交わした。兵士との会話が彼の戦争終結への考えに強く影響を与えたことは間違いない。単に報告書を読むことではわからないであろう戦士たちの体調、疲労感、そして決死の覚悟、この視察後から戦争の遂行とアメリカ国民に対して責任を負う者が第一に果たすべき義務は戦争を可能な限り早期に終結させることであり、その目的に一番適していると考えられるのが原子爆弾の投下だったのである。原爆投下決定前に当時の大統領であったトルーマンと二人で会議²⁴を行っており、そこでスティムソンはこのように発言している。

「日本という国はわが国では低能な国と比喻されているが私はそうは思わない。30年前までは大した技術力も持たない小国であったがこの30年という短い間で欧米に技術力では追いつき、さらには追い抜こうとしている。私は日本を訪れたことがあるがその出来事には何ら驚くつもりはない。日本人はその愚直なまでのまっすぐな思考力、行動力を兼ね備え欧米の列強をしのぐまでに成長した。軍部としては日本上陸作戦も構想には入れているが、死力を尽くして戦闘するであろう日本を相手にしては100万人以上の犠牲が出てしまうと予想している。犠牲を最小限にするためには、原爆投下による衝撃を利用し、その圧力をもってして終戦に向かうしかない。」

スティムソンは日本を訪れたことがあるからこそ、軍部の中では、日本人という種族がどのような民族であるのかを理解していたのである。この会談を受け、トルーマン大統領は原爆投下に対し、行うことを決定し、スティムソンとその部下であったグローブス准将に任せただのである。

結果としてスティムソンは原爆投下を決定した人物として歴史に名を残すことにはなったが自身の行った行為に対して言い逃れをするつもりはなかった。

論文の最後の2段落には

書いたものを読み返すと、平和な時代においては、多くの部分が無常で冷酷に響くかもしれないことに気づかされる。同じことをもっと穏やかに述べることもおそらく可能であろう。しかし、私はそうすることが賢明だとは考えない。陸軍長官を務めた5年間、厳しく胸が引き裂かれるようなあまりにも多くの決断に立ち会わねばならなかったので、戦争があたかも実態とは別の何かであると思ひこもうとしたくらいである。戦争とは死と向き合うことであり、戦時中の指導者たちが発するすべての命令において、死は不可避のものである。原爆投下の決定は10万人以上の日本人を死に至らせる決定であった。この事実はどうのような説明を加えても変えられないし、私は言い逃れるつもりもない。しかし、熟考の末に取られた原爆投下による破壊は、われわれにとって最も嫌悪感を起こさせない選択であった。広島と長崎の破壊が日本の戦争を終わらせたのである。原爆が、焼夷弾による空襲を止め、窒息させる封鎖を解除し、ぞっとするような日米の地上戦を終わらせたのである。第二次世界大戦におけるこの最後の大きな行為を通して、戦争とはすなわち死であることをわれわれはついに突き付けられた。20世紀の戦争は、確実に残酷性を増し、より破壊的で、すべての面において墮落したものと化している。原子エネルギーを解放した現在、人類が自らを滅ぼす能力は、完璧に近いものとなった。広島と長崎に投下された原爆が戦争を終結させた。原爆はまた、われわれは二度と戦争を引き起こしてはならないことを過不足なく明確にした。これは、すべての国民と指導者たちが学ばなければならない教訓であり、彼らがそれを学んだときに恒久平和への道を見出すと私は信じる。他に選択肢はない。

このようにスティムソンは論文を締めくくっている。私が思うにスティムソンは誰よりも合理主義者であったのだ。もし、原爆の投下を白紙に戻し、11月の日本上陸作戦まで戦争が長引いていれば原爆投下の数十倍もの被害が出ていたであろう

う。証拠としてアメリカ軍の上陸作戦の被害予想がおよそ100万人と計算されていた。上陸する側が100万人もの犠牲である。日本はその2倍以上の犠牲、最大では400万人が犠牲になるといわれていた。付け加えてこの数字は戦力になる人数、つまり軍人だけの数である、本土に上陸すれば沖繩戦²⁵以上に民間人に被害が出るのが確実に予想されていた。当時の日本人は捕虜になることをよしとしない教育が行われていたので、より犠牲が多くなっただろう。その報告書をスティムソンは読み、今持っている原爆という手段をとることによって戦争を終結させ一番被害が少なくなる道を選んだのだろう。自らが国際的に非難を受けてでも第二次世界大戦を終戦させたいという覚悟があった。しかしながら戦後スティムソンは戦争を終結したことに対する評価もあったが、原子爆弾という一般人を多く巻き込む兵器を使用する必要が本当にあったのか、疑問の声を投げかけられることも少なくなかった。

第5章 本当に原爆投下は必要であったのか

前章でスティムソンは被害を最小限に抑えつつ早期に終戦させるためには原子爆弾を使用するしかないと言っていたが、実は、最後まで原爆投下をしない道を探していた男がいる。当時、國務次官を務めていたジョセフ・G・グルーである。グルーは日本大使館に勤めていたこともあり日本人の特性をよく理解していた。ここでいう日本人の特性というのは、日本人は天皇制という他国から見れば少し独特の国家形態を持っており、当時の日本人は天皇のことを敬っていた。そのため、天皇制の国家であるということが日本人において大切なことであり、その日本を納得させて降伏させるために一番必要な条件は天皇制の維持であるということである。ポツダム宣言が出される前から何か月もの間、その内容に対してワシントンで何度も討論が行われていた。その討論では大きく二派に分かれ、一つが軍部に無条件降伏を出すので統帥権を持っていた天皇までも撤廃させなければいけないという派閥。もう一方が無条件降伏という言葉を変更し、日本国民が立憲君主としての天皇を望むのであれば天皇制を廃止するつもりは

ない旨を日本人に保証することで、戦争はもっと容易に終わらせることが出来ると主張した。こちらがグルーを筆頭とする派閥である。しかし、グルー率いる派閥は妥協派であるといわれ厳しい批判を受けていた。背景としてはアメリカ政府内の高官たちは、天皇に対して悪いイメージを共有していたのでその天皇制を存続させることは反対する動きが強かったのである。加えて当時のアメリカの世論も日本人に対して大きな偏見を持っており「東洋のサル」、「イエローモンキー」と蔑称で呼び、同盟国である隣国のカナダなどでは日系人であるという理由だけで収監されるということも多かった。

1945年8月になるとその派閥関係の風向きが変わる。日本がポツダム宣言を受諾する直前になっても「君主としての天皇の大権を損なうようないかなる要求も含んでいない」ことを日本側が要求してきたのである。天皇制の撤廃を求めている派閥は原爆を落とされ、国が焼けているような状態でも日本政府は政府の保身ではなく天皇制の存続の一点のみについて要求を出し続けたことに驚きを隠せなかったのである。通常はそのような状態にまでなると無条件降伏や自身の保身に走るのが普通であったが日本はそんなことはなかったのである。この要求を受けアメリカ政府は緊急的に会議を開き日本の天皇制を認めるかどうかの議論が再度行われた。結果としては、天皇制の存続を許可することは明記はしないが暗黙裡に天皇制の存続を承認するというものであった。これにより天皇制を認めると明記をしていないことで国際的に追及されることは基本的になくなり、戦後の国際裁判²⁶まで一時的に時間をおき、日本人を納得させることに成功したのである。結果的に言えばグルー派の意見が日本を降伏させるためには正解だったのである。そして終戦後にスティムソンが論文を雑誌に掲載したとき、グルーはその論文に関して否定的な意見を発した。否定的な意見を出したのはスティムソンの原爆投下こそが戦争を終結させる一つの方法であり原爆投下によって日本上陸作戦で被害が出るはずだった100万人の命が救われたという「原爆神話」²⁷についてである。原爆神話は現在のアメリカにも深く浸透しており、原爆投下に対し、肯定的な意見を持ってい

京都に原爆が落ちなかった理由

る国民も多い。グルーがなぜ否定的な意見を表明したかという、グルーは1945年時点で日本側に天皇制の存続だけを認めれば、それ以外の項目に関しては無条件降伏するはずだと意見を出していた。この意見は政府内でも、ましてやアメリカ軍部では聞く耳を持たれなかった。なぜ戦争に勝っている側の我々が日本に譲歩をしなければならないのかというような意見が多かったのである。しかし、グルーのこの指摘は的を射ていた。戦後に分かったことではあるが、その時期の日本は天皇制を認めてくれるのであれば、降伏する考えを持っていたのであり、そのためグルーの勧告通りにしておけば、実際の終戦の3か月早く終戦したことになり、それが一番犠牲が少なかったからである。スティムソンはこの意見に関してこのように否定している。

グルーの意見についてアメリカ政府も日本が降伏するかもしれないという情報も得ていたが、日本が完全に敗北を認めたとは思っていなかった。日本が最終的には降伏したという観点から見れば、アメリカがもっと明確かつ即、天皇制を護持する意思を表明していれば、戦争の早期終結につながっていたはずだとする考えも可能である。しかし私は軍事顧問であり、その立場であれば、少なくとも日本の一部の指導者が我々の融和的な提案を弱気の証拠と解釈するであろうという点を常に考慮に入れる必要があった。私は、天皇制に関する速やかな声明を主張したグルーの立場を5月の時点では支持しなかった。

確かにグルーの表明通りに動いていれば5月で日本は降伏していたかもしれないが軍部として敵国に関して譲歩する姿勢をとることが出来なかったスティムソンの思考というのも理解できる。戦後であるからそのような批判が出来るのであって、当時の戦時下であれば、そのような指摘はできないと思っていたのだろう。確かに日本政府が降伏の受け入れ態勢をとっていたというのは戦後解っているがそれは、政府がとっていた姿勢であり、軍部ではその姿勢をよしとしない派閥も残っていた。戦争は軍との戦いであることを、軍人で

あったスティムソンは理解していた。それにより、日本に降伏を進めることはその和平反対派にアメリカが戦争を終わらせたがっている。戦争に対する余力がもうないととらえられる可能性も考慮しなければいけなかったのである。原爆投下は本当に必要なことであったのか、様々な資料や記録を調べ私も考えたが実はまだ答えは出ていない。スティムソン側の原爆こそが戦争の早期終戦を決定づけたという意見も間違いではなく、原爆によって救われた命というのも必ずある。一方でグルーの勧告通りに5月の時点で日本に天皇制を認めるという降伏を促していればより戦争の被害を抑えることが出来たであろう。歴史に「もし」は存在しないが何か一つ判断が違えば違う世界が待っていたに違いない。私個人としては、スティムソンを擁護することはない。原子爆弾自体は落としてはいけない兵器であることは理解している。しかし、だからといってスティムソンが原爆投下を決定した張本人であるから許されないことをしたと決めつけるのも良くないと考える。そもそも、原爆を落としたことに善悪を求めるよりも、その被害の大きさから、原爆というのは簡単に人類を滅ぼしてしまう兵器であることを理解し、その管理方法を国際的に考えていかなければいけないのである。その点においてはスティムソンは考えていた。大統領に書を送り、原子爆弾の管理方法を国内、そして国際的にどうするかを表明する必要があると進言したのである。そうすることで、第二次世界大戦後の国際情勢の安定化を図ろうとしたのである。それにより、原爆は戦争の抑止力となり現在に至るまで核爆弾を使用するような戦争は起こってないのである。

おわりに

今回私は京都に原爆が落ちない理由を解き明かすためにこの論文を書いた。結果としては京都に原爆が落ちなかったのは候補地とされながらもスティムソン陸軍長官が京都に落とすことによって戦後の、日米関係の構築に害が出るということから、京都に原爆を落とすことを完全に否定したことがいちばんの要因であると分かった。京都に原爆が落ちていたら多くの文化財が焼失し、戦後の

アメリカとの関係はおそらくうまくいかなかったであろうと私も考える。第二章ではウォーナー恩人説についての真偽を調べたがそれはアメリカ軍の日本の統治を優位に進める為の一種のプロパガンダのようなものであったこと、このような情報によって戦後アメリカに対する感情が徐々に柔らかくなっていったことが分かった。

本論文後半ではそもそも原爆投下自体必要なことであったのかということ論じたが、アメリカ政府上層部でも賛成派と反対派に分かれ議論していた。特にスティムソンとグルーのそれぞれの意見はどちらも間違っているものではないと断言できる。それぞれが譲れない意見を持っており、目指すべきものは早期の戦争の終結であるはずなのに、行政と軍部の立場の違いから意見を違えるというのは、戦争そのものに対する考え方の相違というものが感じられた。特にスティムソンについては、自らが原爆投下を決定し、民間人にも大きく被害を出すことを理解し、その業を背負っていかなければいけないことまで考えた上で原爆投下の判断を下したのである。もちろん原爆は戦争に使われてはいけない兵器である。民間人を大きく巻き込み、一発で10万人以上の犠牲者を生み出す。しかし、当時のスティムソンを責めることはできないのではないか、戦争の早期終戦という一点のみに注力し、原子爆弾を使用するという方法が唯一の戦争終結への道だと信じ、それを決断した男を原爆の被害だけを切り取り、非難することは戦争で命を落とした人への一種の侮辱ではないかとも感じる。これからの歴史においても日本は最初で最後の被爆国でいなければならない。日本が最初の被爆国であることは変わることのないことだが、日本が最後の被爆国であることは、さまざまな人の努力が必要であり、一つの世界平和を表すものである。第二の被爆国を出さないためには第二次世界大戦という原子爆弾の投下でしか戦争が終結することができないと判断されるような戦争を今後起こしてはいけない。私は一日本人として原子爆弾がいかに危険で、影響をもち、抑止力を発揮する兵器であるのか理解していなければならない。

【参考文献】

- 西嶋洋一、『日本の古都はどうして空襲を免れたのか—ウォーナー博士の貢献とGHQの宣撫工作—』2013-12-01 総合政策研究 16巻1号
- 中沢志保、『原爆投下決定における「公式解釈」の形成とヘンリー・スティムソン』2007-01-31、文化女子大学紀要・人文社会科学研究所 15巻51-63
- 吉田守男、『ウォーナー恩人説の検証と反論「日本の古都はなぜ空襲を免れたか」』（朝日新聞社干1）200）
- ヘンリー・L・スティムソン、マックジョージ・バンディ『ヘンリー・スティムソン回顧録 上』中沢志保、藤田怜史訳 2017-6-20 国書刊行会から一部抜粋
- ヘンリー・L・スティムソン、マックジョージ・バンディ『ヘンリー・スティムソン回顧録 下』中沢志保、藤田怜史訳 2017-6-20 国書刊行会から一部抜粋
- ロナルド・シェイファー『アメリカの日本空襲にモラルはあったか—戦略爆撃の道義的問題』（草思社、1996年・2007年、原著 Ronald Schaffer: Wings of judgment: American bombing in World War II, Oxford University Press, 1985年）

【注釈】

- 1 実験被爆国を除く
- 2 AA級目標地として京都、広島が選出
- 3 「ヘンリー・スティムソン回顧録」から一部抜粋
- 4 ヘンリー・スティムソン論文および日記から抜粋
- 5 ジョセフ・C・グルー国務次官の主張
- 6 第3回目標選定委員会
- 7 呉港や他にも際めて重要な軍需拠点が集合していた
- 8 1945年8月15日に受諾
- 9 1945年6月14日目標選定委員会により決定
- 10 1945年3月10日被災者は約310万人、損害家屋は約85万戸以上

京都に原爆が落ちなかった理由

- 11 アメリカの文化学者
- 12 翻訳学校のこと
- 13 各国の文化財保護を目的とした委員会
- 14 日本を代表する美術史家、美術評論家
- 15 大阪樟蔭女子大学教授、歴史学者
- 16 アメリカ陸軍元帥、連合国軍最高司令官
- 17 原子爆弾開発計画の総称
- 18 注9 同日
- 19 1893年にメイベル・ホワイトと結婚その後ハネムーン
- 20 第二次世界大戦終戦後、冷戦へと発展
- 21 注3と同上
- 22 アメリカ出身の実権物理学者
- 23 戦争状態においてもあらゆる軍事組織が遵守すべき国際法
- 24 1945年7月2日
- 25 沖縄戦の被害は民間人が約94000人
- 26 極東国際軍事裁判のこと
- 27 原爆によって100万人の命が救われたという神話、アメリカでは現在でも支持を集めている。